

令和4年度第1回
日野市総合教育会議

議事録

日野市企画部企画経営課

令和4年度第1回日野市総合教育会議議事録

日時 令和4年11月15日(火)15時00分～17時00分

場所 市役所4階庁議室

出席者 大坪市長、堀川教育長、高木教育長職務代理者、西田委員、真野委員、東委員
事務局 波戸副市長、村田教育部長、長崎教育部参事、小林教育部参事、伊藤庶務課
長、廣田庶務課係長、高橋企画部長、中村企画経営課長、馬場企画経営課係
長、鈴木企画経営課係長、伊藤企画経営課主任

登壇 平山小学校北里校長、日野第一中学校和田校長

議事

(1) 開会あいさつ

(2) 議題

議題第1号 日野市長期ビジョンの策定について

議題第2号 第3次学校教育基本構想の取り組み状況

(3) その他

○ 中村企画経営課長

それでは、皆様お揃いですので総合教育会議を始めさせていただきます。

総合教育会議は、市長が招集する会議となっております。議事進行は市長にお願い申し上げます。

○ 市長

それでは、ただいまから、令和4年度第1回日野市総合教育会議を開会いたします。

次第に従い、開会にあたり一言あいさつ申し上げます。

本日はお忙しい中、令和4年度第1回総合教育会議にご参加いただき、誠にありがとうございます。今年の2月東京2020オリンピック、パラリンピック大会のホストタウンとして日野市とつながりを持つウクライナがロシアに軍事侵攻されるというショッキングな出来事がありました。それに伴い、全世界の平和や経済活動が脅かされ、半年以上が経過した今もなお、さまざまな影響が、この日野市にも起こっております。

軍事侵攻の様子がテレビ、ネットで流れている状況を、子どもたちは敏感に察知していると思います。平和について改めて考えると共に、こういったことが起こらない社会を子どもたちに残すことが私たちの使命であるとも改めて考えさせられました。

また、原油価格や物価の高騰、歴史的な円安などは、コロナ禍が続く中で、子どもたちの学びを支える家族、地域に大きなダメージを与えました。コロナ禍から続く児童虐待の件数増などの課題には、教育委員会と共に取り組んでいければと思います。

子どもたちと共に、持続可能な社会を構築するため、まずは、本日、教育委員会と市長部局がそれぞれ把握している情報を共有しながら、意見交換していきたいと考えております。

それでは、次第に従い、本日の議題に入ります。始めに、「日野市長期ビジョンの策定について」を議題とします。まず、事務局から説明をお願いします。

○ 中村企画経営課長

企画経営課長の中村でございます。私の方からは、2030長期ビジョンの策定についての報告をさせていただきますと思います。

日野市の長期ビジョン 2030 ビジョンを作るために、日野市に関係のある市民、職員、多くの方を巻き込んで未来に花を咲かせる種をまくプロジェクトということの意味合いを兼ねてヒノタネプロジェクトと名付けさせていただいております。未来に目を向けるきっかけを作るものとして、このプロジェクトを2030ビジョン策定プロセスの中で実施しております。

2030ビジョン策定の背景をちょっと触れさせていただきたいと思います。今世界的にVUCAという、変化し、不確実、複雑、あいまい、予測困難な時代という社会を迎えております。今までのいわゆる総合計画といわれるものは予測可能な右肩上がりという社会の中で作られてきた行政計画という、そういうものから今一度立ち返って、人口規模が縮小していくこと、縮んで行く社会、そういったことも考えながら社会、世界の中で日野やその日野を取り巻く地域というものがどんな

方向を目指すのか、大きな方向がある中で現状を維持するだけでは取り残されてしまう、そういった中で地域としてどんな方向を目指すのかをビジョンとしてまとめるというところでございます。日野は行政と地域が連携しながら取り組んできたという長年の蓄積がございます。例えばごみ改革であるとか、多摩平団地の建て替えであるとか、それから今教育委員会さんと一緒にやっている部活動の地域移行、そういったもの、こうした協働の経験を活かして広げていきかけとしたいと考えています。社会環境の変化は書いてある通り、人口、労働力、気候変動、テクノロジー、日野市の環境変化で言えば人口の減少、これは日本中どこでもということなんですけども、それから社会保障費の増加、地域産業構造の変化、そういったものがあります。

続きまして、2030 ビジョンで目指す姿です。1 つの視点やアプローチで解決が難しい社会課題に対して、各主体者が目標を共有し緩やかな協調関係の中で全体性を補完しながら取り組むことを目指しています。よく昨今言われているウェルビーイング、またカタカナですが、持続可能な人の幸せ、社会の幸せ、そういったことが大きな理念としてあります。これは WHO の世界保健機関の憲章の前文で書いたことみたいなんです。健康というのは肉体的、精神的、社会的に満たされた状態、それをウェルビーイングという、そういった大きな理念の中でそれぞれの主体が様々な背景、それから属性、課題を共有しながら、1 つのイメージを持って策定していく、そんなプロセスということだと思っています。ひと昔前ですと、産官学連携なんていう言い方をしていましたけども、おそらく今の時代はさらにそれが進んでいって、それぞれの立場を超えて、ごった煮のような状態に戻って、そこから一緒に考えていきましょうみたいな、そういう世界なのかなと思っています。

2030 ビジョンを作る過程として、企画経営課の方では1 つの目標というか、プロセスとしての目標を立てて作業をしているところでございます。延べ人数 1 万人の関係者の方と、意見を聞いたりアンケートであったり、タウンミーティングという形で関わりを作っていくと、それから新しい SNS といった機会も使いながら、多くの方々と関わって作っていくということによってやっております。タウンミーティングの参加者延べ人数として現在のところ約 500 名、学生、小、中、高校生、大学生の授業やアンケートなどで約 3,750 名、それから今やろうとしている大人向けの市民意識調査、それから通勤通学の人口調査、それから市民、団体、職員のインタビュー、それから一般投票、ボードを置いて投票していただくようなアナログ的な施策もやって、それから SNS の note というのをはじめさせていただいて、現状のところ 4,752 名の方が 2030 ビジョンの策定プロセスに関わっていただいているということでございます。

策定のスケジュールについてです。大きくプロセスとして 4 つございまして、1 つはありたい姿の定義、共有というところで様々な媒体を使って発信するということ、それから地域視点でのビジョン開発として市民向けのタウンミーティングというのが上から 2 番目、それから 3 番のところで職員向けのミーティングというのを併せて同時並行でやっていくという、市民の方々のお考え、それから行政のこれからは担っていく若手、中堅どころの職員たちの思いということもミーティングの中で、そのキャッチボールをやりながら最終的には高めていくということになります。

第 1 回のタウンミーティングを、9 月 25 日の日曜日に多摩平の森イオンモールのイオンホールで展示会という形で実施いたしました。日野市の 100 年間の街の成り立ちというボードを使って、

市役所が検討しているビジョンの骨子案などの説明、それから 100 年ツアーと言って、日野市の歴史をちょっと学びましょう見たいな、そんな企画も併せて行いながらミーティングを行いました。なるべくアプローチのしづらい現役世代にも興味をもってもらえるように、スタンプラリーとのコラボや高校生、中学生にも参加を呼びかけさせていただきました。参加者からは、ごみの排出量がかつては多摩地域ワースト 1 だったこと、2021 年には同規模の自治体では全国 2 位の少なさとなっていることなどを皆さん学んでいただきまして、非常に誇りに思うという声も聴かれました。

タウンミーティングでは、それぞれの役割において、どうしたらよいかということを考えてもらうことを重視してやっております。行政職員も主体性を持った意見を出したり、関わってもらうということで、あえて同じテーブルではなくて別々のところで意見を自由に出していただいて、その間をつないでいくというようなやり方をしております。双方を往復しながらいいものにしていくしております。

対話のテーマとしては、日野の目指す姿としてみんなで共有したい価値、大事にしたいことは何でしょうかということ、何がなくなったら、何が変わったら日野市から出ていきますか、こういった問いを出しながらテーマで話し合ってもらいました。例えば大事にしていきたいところでは、ありのままの自分自身を受け入れてくれる、適当さ、自由さ、居場所はあるけれど自分の場になっていない、自分のものと思えていない、そんな意見があつたりします。4 番のところ、日野市にどんな交流の場、使える場所があつたらいいかという問いは、性別、年齢、障害の有無など関係なく集える居場所、気軽に参加できる居場所、ですね。6 番のところ、こんな日野市役所になってほしいって思うことは何ですかは、日野市の職員の誰々さんのように人が見えてくるといいですねとか、人が見えてくるとミスも許せる、非常にお優しい言葉をいただきました。こんなテーマで職員と話したいという意見も募集したところ、街全体で子育てできる街、どうしたらママさんが子育てしやすくなるのか、ごみの排出量が少ない市で 1 位にしたい、日野市の認知につなげたい、他の視点から見た日野市について話したい、日野市の自然を活かした魅力発信、そんなご意見をいただきました。

共通するキーワードですけれども、いろいろな人が街に生きているんだ、自分も他者も認め合っている、顔の見える関係、街に賑わいを作る、日野のニッチさやローカルな良さの発信、心のよりどころ、居場所、街のきれいさ、自分の暮らしの充実、そんなキーワードが見てとれるかなと思っています。

市民意識調査についてです。教育委員会さんのご協力をいただいて学校の子どもたちに意識調査を行いました。皆さんご承知の通り、非常に少子高齢化が厳しい状態になっています。人口は 50 歳から 54 歳の山を中心に、そこから急激に減っている。2030 年の時に世の中を背負っている現役世代になるであろう 15 歳前後の方々の意見を、積極的に私共は取り入れていきたいと思っています。これまでの市民意識調査では回答年齢の偏りがあるのは明らかでして、やはり高齢者の方ほど回答率が高くなっています。

小中学生版の概要になります。対象者数は 7,203 名で、小学校 5 年生、6 年生の 3078 人、中学校 1 年生から 3 年生の 4,125 人を対象にさせていただきました。それに対して回答があつたのが 3,634 名、回答率は 50.4%です。今回は 10 月 14 日から 31 日という短い期間で実施

しました。教育委員会や学校関係の皆様にもご協力いただき、改めてお礼を申し上げます。通常のアンケート調査ですと、大体回答率 25%ぐらいがいいところで、30%行くと非常にすごい、その中で 50%の回答をいただいたということで、本当に貴重な意見を拾うことができました。

本題とは逸れますが、ご回答いただいた方の日別、時間別のデータですけれども、時間が特徴的で 8 時台、おそらく朝のホームルームの時などでお声をかけていただいたものと思います。ほかにも 14 時台の回答が目立つなど、学校の中で先生方にご案内いただけたと感じています。

意識調査の回答結果の簡単なポイントとしては、もともと調査時に仮説として設定していた地域に対しての肯定感と言ったところが、将来に対する期待と関係性があるんじゃないかということ、仮説を立てながら問いを作りました。やはり 1 人の子どもにどうやってどう向き合っていくのか、向き合い方が大切だなということが見て取れるものでございました。

学年別の結果です。左側から小学 5 年生、6 年生、中学 1 年生、2 年生、3 年生となっています。上のグラフは「私の暮らしている地域や街は好きだ」という質問、下が「将来暮らしている街は今よりもよくなっていると思う」という質問です。上が現在のことを聞いて、下が将来のことを聞いています。設問として、あえてそうしています。やはり年代が上がっていくにつれて、あてはまるという回答が下がっていく傾向が見て取れます。現在の街は好きと答える人に比べて、将来の街はよくなると答える人の割合は低いことも見て取れます。

次に自由記述の結果です。全体で自由記述が 7 万文字くらいあるものの中から、傾向として表れている単語として出現回数をカウントしてピックアップをさせていただいております。やはり自然、環境、平和と自由、それから居場所、便利さということがキーワードとして強いかなと思います。

続いて、現在の街と将来の街に対する 2 つの質問に、肯定的な意見と否定的な意見を持つ人を 4 つの象限に分けました。左側の軸が「私の暮らしている地域や街は好きだ」という軸、上が肯定的、下が否定的です。下の軸に行くと「将来暮らしている町は今よりもよくなっていると思う」、同じく右側が肯定的、左側が否定的となっています。それを 4 つの象限に分けて見てみると、意外と右上の現在も未来もこの街というのはいいよね、よくなっていくよねと肯定的にとらえているお子さんたちが 591 人、逆に左下の現在も未来も良くないという意見が 46 人となっています。文字の色はこちらで色分けさせていただいて、赤が多様性、オレンジ色が安心安全、紫色が開発、緑色が環境、青色の文字がシビックプライドを表していると思われるところです。現状があまりよくないという意見を持っている人は、比較的開発や都会らしさといったものを求めていることが見て取れます。また、現状に対して肯定的な人は、自然環境や協力し合うといった意見が見受けられます。やはり市内の不祥事については、子供世代もネガティブに捉えている印象があるなというところもあります。

続いて、先ほどの象限の右上と左下の部分の自由記述を抜き出し、可視化しました。右上が 591 件、左下が 46 件ですので、左側が 591 件の言葉の集まり、右側が 46 件の言葉の集まりですので、同列には見られないんですけど、そこはちょっとご理解いただければと思います。どちらにも共通して出てくるのは暮らしやすい、住みやすいという言葉であり、日野市は暮らしやすい街という印象があることが見て取れます。こちらの言葉のキーワード

の傾向というのは、市民向けのタウンミーティングでも同じような傾向が見られています。それからネガティブな、現在も将来もあまり良くないという意見の人は、例えば賑わいとか古さみたいなところの言葉を言及されている。日野にはない要素といいますか、例えば非日常とか都会的なデザイン性のようなものを、今後の場づくりや発信に取り入れたりすることが、必要になってくるのではと感じているところです。

まとめでございます。今回、このアンケートを通して得られたこととしては、ご覧のような部分になります。まず、アンケートが WEB 上で回答できるということで、子どもたちが回答しやすかったと思います。それから、子ども世代との信頼関係を作っていくことが、将来の街に対するポジティブな意識にダイレクトにつながっていくだろう、そんな可能性があるということを感じさせていただきました。一方、子どもたちに直接は聞きにくい、不満な点を、一定程度把握できたこともよかったです。子どもたちがどこまで定住というか、自分たちが大きくなったらこの日野に住みたいのかはわからないですけど、そういったことの設問は特に入れておりませんでしたので、大人になって U ターンするようなことも地域との愛着との関連性などを深堀できたらいいなと思います。以上でございます。

○ 市長

ありがとうございます。事務局から 2030 ビジョンの策定の経緯とともに、小中学生へのアンケート結果について説明をいただきました。ここまでの説明について、ご質問、ご意見があれば伺います。

○ 高木教育長職務代理者

高木です。どうも説明ありがとうございました。SDGs の目標の 17 にパートナーシップで目標達成しようというのがありますが、先ほど説明いただいた中で、学生アンケートなどで小中学生に焦点を当てた部分について、もう少しどのような背景なのか、詳しく説明いただけたらと思います。また、行政として学校教育や小中学生にこういった長期ビジョン策定に向けてどのようなことを期待しているのか、現時点でのお考えで結構ですが、教えていただければと思います。よろしく願いいたします。

○ 中村企画経営課長

これまでの行政計画というものは平日の夜とか土日に集まることができる方々と一緒に作ってきました。やはり行政に対して意識がある、興味がある方々だけの声になってしまうところがあって、やはり 2030 ビジョンと言ってるのは日野市の将来という長期的な、まさしくビジョンとして作りたい、その際に行政や一部の属性に偏った方だけで作るのではなくて、これからを担うお子さんたちにも関わっていただきたいという思いで実施しました。期待することとしては、先ほどの日野市の人口の構成比を見ていただいても分かるとおりに、これからの子どもたちにすべてを押し付けてしまうのではなくて、いい道筋を一緒に作っていきたい、一緒に考えていききたいというパートナ

一として参加していただけるといいなと思います。

○ 高木教育長職務代理者

ありがとうございます。

○ 市長

他の方がいいでしょうか。

○ 西田委員

西田です。よろしく願いいたします。詳しい説明をありがとうございました。市民意識調査を小中学生に対して実施したことはとても良い機会だと思いました。調査からいろいろと知ることができました。そのことについてはまた後程述べさせていただきますが、子どもを含めた全市民で2030ビジョンを作成する意図が今の説明でよくわかりました。そこでお尋ねしますが、今後小中学生は作成に具体的にどのように関わっていくのでしょうか。お考えをお聞かせください。

○ 中村企画経営課長

タウンミーティングには、お子さんたちも参加していただいています。特に何か声をかけて全員来てくださいみたいなことはやらないですけども、お子さんも参加できるような仕掛けの中で参加していただきたいと思っております。それからビジョンが完成した暁には、そのビジョンをわかりやすく理解してもらうような漫画で発信することも考えています。そういったものを教材というちょっと大げさですが、今回関われなかったお子さんも含めて、日野市の未来について一緒に考えるようなものとして使っていただけるといいなと思っています。

○ 西田委員

積極的に小中学生が関わっていくのかと思ったものですから、ちょっと描いていたイメージが違いましたね。ありがとうございます。

○ 市長

他の方がいいですか。

○ 東委員

東です。ご説明ありがとうございました。アンケートで様々な現状、未来を担う子どもたちの声を把握できたと思いますが、その色々取れたデータとか声をどのように2030ビジョンに活かしていくか、そのお考えを教えてください。

○ 中村企画経営課長

当然先ほどのアンケートの結果を要素としてまとめさせていただいて、コンセプトやキーワード、それから今後のアクションに対してつなげていけるように意見はなるべく取り入れていくことを考えております。

例えば、大人からは出なかったが、子どもだけに出てきたキーワードなども大事にはしていきたいと思っています。

○ 東委員

ありがとうございます。

○ 市長

では真野委員。

○ 真野委員

子どもたちの声ってやっぱり大事だなと思って、その言葉をどう吸い上げていくのか、どう捉えていくのかを大切にしていきたいと感じました。子どもたちの素直な思いというか、そういったものもぜひ吸い上げていただければいいかなと思います。私からは以上です。

○ 市長

事務局は今の意見に対して何かありますか。

○ 中村企画経営課長

やはり中学生ぐらいになると大人に近づいているというか、大人と変わらないぐらいの意見も多かったのかなと思っています。それについて詳細を知りたいということでしたらまた事務局の方で可能な範囲で対応ができるかなと思います。

○ 市長

大人の場合はある程度行政の仕組みを知っていて、このようになってほしいとか、ここまでしかできない、ここから先はもっと大きな問題であるとか、ある意味での分別がついていますけど、恐らく子どもたちはふわっとした感覚でものを言いますから、遠慮なく意見が出てきているとい感じます。そういった子どもたちの視点を活かしてビジョンの策定を進めているという説明でした。では今後の進め方ということで、事務局の方からお願いいたします。

○ 中村企画経営課長

今後についてです。先ほど説明させていただいたスケジュールに沿っていきますと、この後タウンミーティングが12月20日にあり、それからビジョンが完成したというところで、ビジョン策定を

踏まえた周知のイベントなんかもやっていきたいと考えています。

今、たくさんのご意見をいただいた中で、本体のキーコンセプトをまとめている途中でございますけども、このようなかたちでまとめているところです。左上が環境系、例えば環境系の中には「みんなが協力しあうごみゼロ日本一のまち」とか、「水やみどりが日々を豊かにしているまち」、「環境にやさしく、住むことが誇りになるまち」だとか、こうした意見をエッセンスとして、まとめているところです。それから産業系、デジタルイノベーションというところは、「暮らしの中からイノベーション」、リビングラボのようなところだとか、「未知をおもしろがり、探求できるまち」というのがいいよねといったところです。それから右上の多様化系では、「中高生の自分も活動を実践できるまち」のような意見があります。右下の居場所系、「心地よい居場所、住み続けたいまちを自分たちで作るまち」、「適度な距離でいろんな人が好きなことをやっているまち」。下の方に行くとなんか、市の職員はどう変えていきたいのかというところ、それからシビックプライドとして、「暮らしの余白が価値を生み出すまち」。今このような感じでコンセプトをまとめているところです。

ビジョンの最終的なまとめ方のイメージです。これは金沢市の金沢未来シナリオというものを参考として持ってきています。この未来シナリオでは、やることチェックリストとあって、小さく四角くなっているのがこれを自分はやるというチェックをつけて、そのコンセプトに対して自分が行動するアクションとしてのチェックリストみたいなものを兼ねているという形になっています。それから右上のところに QR コードがあり、色々な人のアイデアが蓄積されるという仕組みになっています。日野市の2030ビジョンでもこのような感じで、今回のまとめをしていきたいと思っています。それから先ほどお話しましたが、副読本として漫画を作ろうと思っています。ご覧になっていたものは日野自動車のデザイン部が作成しているもので、分かりづらい部分を漫画で補足しています。こういったことを我々も参考にさせていただいて、わかりやすいものとして漫画を作っていきたいと思っています。

また、中学校8校の有志が気仙沼市と連携して中学生同士が交流をしている、未来につなぐ創造力プロジェクトというものがあります。今年は2030の日野をテーマにさせていただき、事後学習まで私ども企画経営課の職員が同行させていただきました。子どもたちの姿勢が変わっていく姿を間近で見させていただきました。夏休みが終わって中学生全体で集まるのが難しくなるということもあるんですけども、学校の中ではできないような大人とふらっと話せる場として私どものヒノタネミーティングの場を使っただけじゃないかという呼びかけもさせていただいています。

そういった機会を通じて、子どもたちと一緒にこのプロジェクト、2030ビジョンを活かしていくような場を来年度も作っていきたいと思っています。

当然ながらビジョンを作った終わりということではなくて、作ったあとも一緒に取り組んでいく、課題を共有して話し合っていくことを続けることが大事だと思っています。学びで得られたこと、感じたこと、それを次にどんな工夫をしてみるか、それが広がっていったらどうなるかなとか、地域内外の取り組み、実際に働いている大人との接点みたいなところの出会いとか、そういったところでもよりお互いに相乗効果が生まれるのかなと思っています。以上でございます。

○ 市長

今後どのようにビジョン策定を進めていくかという話を事務局からしてもらいました。今の話を踏まえまして、ご質問、ご意見等ありましたら是非お願いいたします。

○ 高木教育長職務代理者

質問ではなくて意見ということで述べさせていただきます。今年の 1 月に開催した前回の総合教育会議では、議題を持続可能な社会を構築する力を伸ばす教育環境の実現とし、具体的には SDGs について日野市の取り組みですとか、小学校での取り組みについて日野第六小学校の校長先生や児童の皆さんによる発表等も交えて、論議をさせていただきました。改めて、その論議内容を振り返りますと、今回の議題の日野市長期ビジョンの策定についての関連性や連動について読み解くことができました。先ほどの質疑応答にて、日野市長期ビジョンの策定に当たり 2030 年、あるいはその先を見据えて、社会の第一線に立とうとしている小中学生も策定に参画し、知恵やアイデア、具体的な力を貸してもらいたいという意向については理解いたしました。前回の総合教育会議でも述べさせていただきましたが、SDGs の達成に貢献する ESD、持続可能な開発のための教育は児童、生徒たちが社会に参加するための教育であるので、実際に社会との交流の中で学びを深めることが大切になります。事業で学び、計画したことについて、地域の中で実行、評価、改善といういわゆる PDCA サイクルを回すことが必要になります。これまでの教育は学校の中での閉じられた枠組みの中でされてきたという傾向が強かったわけなんですけども、SDGs 関連の教育は、社会や地域とのつながりが非常に大切になってきます。児童、生徒たちの計画の実践の場としてやり方を工夫しながら、地域の皆さんや行政、企業等をはじめとする幅広い市民の皆さんの協力が必要となります。SDGs も日野市 2030 ビジョンも、2030 年までに達成すべき目標ということや、達成に向けて諸力融合が求められているなど、共通点もございます。今回の日野市長期ビジョン、2030 ビジョンの策定にあたって、行政としてパートナーとしての小中学生にも広く参画を求めていくことは大変意義あるものであり、児童、生徒の皆さんにとっても、その力を計画や実施などの場面で発揮できる良い機会と考えています。若い力が遺憾なく発揮できますように、教育現場との調整をはじめ各種条件や環境の整備を行い、進めていただきますようによろしくお願いいたします。以上です。

○ 市長

ご意見ということでいただきました。真野委員お願いいたします。

○ 真野委員

私も意見ということで述べさせていただきたいと思います。初めに日野市の長期ビジョンの策定に向けて、このプロセスに子どもたちを巻き込んでいくということについて、子どもたちの育ちの視点でもとてもいい取り組みではないかなと感じました。ぜひ力強く進めていただければと思います。

ます。高木委員もおっしゃっていましたが、昨年の総合教育会議で、SDGs の取り組みを子どもたちが紹介してくれました。その時感じたことは、子どもたちの自分にできる SDGs の取り組み、これはなかなか大人の発想では出てこないと感じたり、先ほど市長もおっしゃってましたが、ある意味では型破りなそういう発想、いろいろな気づきを私たちに与えてくれるものとなりました。そういうことを踏まえて、市の取り組みに子どもたちを巻き込んでいくという発想、私も大賛成なんですけどもさらに踏み込んで言えば、2030 年の主役は子どもたちで、その子どもたちの発想に学び、何か応援できることはないだろうか、さらに広げていくことはないだろうか、そのような視点を大切にしていくことが大事ではないかなと思いました。そのためにも先ほど紹介にもありましたが、例えばごみの取り組みで日本一という言葉がありましたけれども、日野市のいろんな魅力、いいところを子どもたちに届く言葉で、先ほど漫画をつかおうというこの発案もとてもいいとは思いますが、子どもたちに届く言葉で発信をしていく、そういうことも非常に大事になってくるかと思えます。いずれにしてもその根底には、日野の子どもたちには大きな力を持っているぞと、この子どもたちが言ってくれること、私たち大人は子どもたちが言ってることなんだからということで、私は大人も素直に受け止めてくれる、そのように感じております。そういう意味でぜひ進めて行っていただければと思います。私からは以上です。

○ 東委員

私の方からも意見を述べさせていただきます。未来を生きる次世代の子どもたちをパートナーとしてともにビジョンを作っていくことに関しては大賛成です。教育委員会でも子どもたちの意見を大切にして教育活動を進めてきているのですから、子どもたちがプロセスに関わって市民の 1 人として自分事にしていくことが何よりも大切なことだと感じております。また作っていくプロセスを開放していくことはとてもとても大切なことだと思っているんですけど、必ず付いて回るのがどうしても一部の参画した人たちで作ってしまうというようなことになってしまうこと。それを無くすためには、そのプロセスを開放していくとともに、市民に情報の発信や共有を丁寧にしていくことが大切だと思っています。最近 note など新しく活用されて新たな発信を工夫されているのは拝見しております。教育委員会でもよく触れさせていただいているんですけども、よりよく伝えるという観点で、手法の 1 つとしてフォントをユニバーサルデザインのフォント、UD フォントなどにしていくことはどうかということ、いつも触れさせていただいております。行政文書などはどうしても形も決まっているし、どうしても当たり前に使っているフォントなので、感覚的に違いとか効果を感じずらいとは思いますが、例えば明朝体であるとかはディスレクシアなどの読み書き困難な方でなくとも、高齢者にも読みづらいと言われております。一般の方でも UD フォントは目に優しく読みやすいと言われてるので、よく障害は人にあるのではなく社会にあると言われておりますけれども、そのような側面からでも社会の方を変えることができるのならば、フォントを変えることは取り組みやすいことの 1 つではないかなと感じております。それ以上に SDGs や共生社会をうたっている日野市として、優しい街、より思いを伝えるという姿勢そのものがこの 2030 のタイミングで市民に伝わるととても良いなと思っています。以上です。

○ 市長

ありがとうございました。西田委員。

○ 西田委員

わたくしは感想と意見を合わせて述べさせていただきます。市民意識調査の小中学生版の結果を見せていただきましたが、自分の暮らしている地域や街は好きだという質問については88%の小中学生が自分の暮らしている地域や日野の街を好いていることがわかりました。10年後の街についても、かなり肯定的で明るい姿を描いています。コロナ禍が長引く中で、子どもたちが明るい未来を描けなくなっているのではないかという声を最近よく聞きます。日野の子どもはどうか気がかりでした。この度の意識調査の結果を見ますと、コロナ禍に負けない子どもたちの姿を知ることができました。一方で、誰かに勧めたい場所や景色があるかという問いには、あるという答えは57%でした。半数近くの小中学生が誰かに勧めたい場所や景色が思い浮かばないことがとても残念です。また大人として責任を感じました。小中学生はどんなことを望んでいるのか、率直な気持ちを聞き、一緒に考えて2030ビジョンに活かしていきたいと思いました。また2030ビジョンは、策定までの過程と活用の両方が重要であるから、子どもたちにも策定や活用に入ってほしいという考えはとてもよいと思いました。今、子どもたちは持続可能な社会の作り手になることが求められています。そしてそれを社会との連携及び協働により、その実現をはかっていくことが学習指導要領にも示されています。したがって、子どもたちが日野市の2030ビジョンの策定や活用のパートナーになることは、今日の教育に求められているものと合致します。日野市の小中学生の日ごろの活動から、2030ビジョン策定に参加できる力は十分育っています。また自分たちがビジョン策定に参加することで、より成長して良き活用者になると思います。学生に多様な人たちが様々な形で関わり、率直な気持ちや夢を伝えあって日野市だから生まれる2030ビジョンを作ることは市民にとって楽しいことであり、有意義なことだと思います。そして日野市全体が元気になることだと思っています。教育委員会も一緒に作っていきたくと思っています。なお少々付け加えますと、いただいたスライド資料を読みますと、理解しにくい言葉や表現がいくつか見られました。市民の方と一緒に作っていくのですから、なるべくわかりやすく、伝わりやすく、共感できる言葉や表現が大事だと思っています。先ほど漫画のお話などもいただきましたが、その辺は十分考慮して進めて行っていただきたいと思いました。ありがとうございました。

○ 市長

ありがとうございました。教育長。

○ 堀川教育長

私の方からもお話を伺っての意見ということで申し上げさせていただきます。西田委員からも言及があったところですけども、学習指導要領の前文に、1人1人の子どもが持続可能な社会の

作り手になることができるようにするということが記載されています。このことは学校教育の非常に重要なミッションであると考えています。そういった意味では、持続可能な幸せ、持続可能な社会を作っていくという意味で、2030 ビジョンと共通するものがあると思っています。その 2030 ビジョンについて説明のあった子どもたちや市民も含めて、政策の受け手という意味ではなくて、パートナーだという考え方をし、私自身もヒノタネミーティングに参加させていただきましたけども、その時に参加した子どもからも大人と対等な立場で議論ができて楽しい、うれしいという言葉、意見がありました。このことは素晴らしいことだと思っていて、どういう意味で素晴らしいかと申し上げますと、やっぱり持続可能な社会の作り手を育てていくという意味、そして社会に開かれた学び、これを実現していくという意味でも子どもたちにとって社会と直接つながって社会課題と直接向き合って学ぶということができるとなると考えています。未来の主演というのは子どもでございます。その上で日野市は、子どものことをすごく大切にすると私自身実感しております。これから市長部局と教育委員会より一層の連携を深めながら一緒にビジョンを形にしていければと考えております。以上です。

○ 市長

ありがとうございました。2030 ビジョンのプロセス、それから今後という話で、まだまだ、ちょっとしたものをご提示できてはないかなとは思いましたし、委員の皆様が特に前回の総合教育会議で第六小学校のプレゼンテーション、これが記憶に残っていて、それに比べるともう少し頑張れよというようなところがあるのかなと思いつつ聞かせていただきましたし、貴重なご指摘いただきました。子どもたちに届くような声で発信していくということ、当然子どもが言うから大人も素直に受け止めていくという、そういう出し方が必要だし、また一部の参加にとどめない必要があるという東委員の意見もありました。そのためには市民に情報発信をしていって、より広く意見をいただく、また UD フォントの活用などもいただきましたし、西田委員からはご評価いただきながらも、理解しがたい言葉、表現がたくさんあってということの部分も、改善の余地があればと思います。いずれも子どもたちをパートナーとして、そしてそれから持続可能な社会の担い手として位置付けているということについては高い評価をいただきましたので、幾つかご指摘いただいた問題点、課題を踏まえながら、これからしっかりと 2030 ビジョンを完成に向けて作っていきたく思っておりますので、ぜひその点についても、引き続き教育委員の皆様からご指導、ご協力いただければと思いますのでよろしくお願いいたします。それでは議題 1 についてはこれで終了させていただきます。

次に議題第 2 号、第 3 次学校教育基本構想の取り組み状況についてということで、事務局からお願いします。

○ 村田教育部長

第 3 次学校教育基本構想が策定させてから 4 年目に差し掛かっています。来年度は最終年度となります。本日は、平山小学校の北里校長先生と日野第一中学校の和田校長先生にお越し

いただいております。お二人から、第3次日野市学校教育基本構想に基づいた取り組み状況について実践を通じた研究概要を発表していただき、取り組みについて皆様と共有し、最終年度に向けて大切にしていきたいことなどをご意見としていただきたいと思います。それでは、発表をお願いいたします。

○ 北里平山小学校長

では、これから平山小学校の研究概要を説明させていただきます。本校は昨年度まで、日野市教育委員会研究奨励校として、第3次日野市学校教育基本構想の具体化に向けて取り組んでまいりました。そして今年度も継続して研究に取り組んでおります。

現代の社会においては、グローバル化や少子高齢化、ICT化が急速に進行し、社会の価値観が大きく様変わりをし、またSDGsなど未来に向けて取り組むべき課題も数多く存在しています。このような先の見えないこれからの社会では自分たちで考えて自分たちの進むべき道を見つけ出していくことが大切であると考えました。基本構想の中では、一律一斉の学びから自分に合った多様な学び方へと、自分たちで考え、語り合いながら踏み出す学び合いと活動へという2つの新しい学びへの転換が示されております。このビジョンの実現に向けて平山小学校では、個別化と協働化という観点から、一人一人を大切にしたい学び合いを研究テーマに設定し、一人一人の興味関心や能力、進度に応じた学びと、それを支える協働的な学びの実践と研究に取り組んでまいりました。では一人一人を大切にしたい学び合いの取り組みについて説明をいたします。

初めに自由進度学習です。単元内の自由進度学習は、子どもたちが教師作成の学習ガイドラインを基に、自分のペースで学習を進めていく学習形態です。単元の授業数が8時間であればガイドラインに沿って8時間学習をいたします。授業が始まると、子どもたちは学習の目当てをガイドラインで確認し、教科書や1人1台端末を使って自分で学習を進めていきます。理解の早い児童はガイドラインの内容終了後に発展学習に取り組むこともあります。1人で取り組みたい子、友達と相談しながら進めたい子、一人一人の子どもたちが自分の学び方を選択しながら進めていきます。個別に学習を進めるだけでなく、わからない問題があると友達と確認したり教えあったりすることもできます。緩やかなつながりの中で学びを進めていくことで、子どもたちは安心して学びに向かうことができます。またテキストで学ぶだけでなく、学んだことを友達に説明したり話し合ったりする対話の機会を設定することで、子どもたちの思考力、判断力、表現力を発揮して学びを深められるようにしています。教師は、一人一人の学びの様子を見取りながら、一人一人に適した支援をしていきます。個別に支援をしたり友達とつなげ学び合いを促進する支援をしたりして、様々な支援を行っていきます。また全体への問いかけや確認が必要な場合には、一斉指導をする場合もございます。

次にプロジェクト型学習です。プロジェクト型学習とは、いわゆる問題解決型学習、課題解決型学習と言われるものであり、問題を見つけ、問題を自ら解決する能力を身に付ける学習です。その過程で様々な知識を得ながら、個人だけではなく、複数で学ぶ場合もございます。本校では個別化と協働化の二つを充実させるために、児童の主体性と学びのプロセスを大切にしたいプロジェ

クト型の学習に取り組んでいます。生活科や総合的な学習の時間とともに、教科学習の中でも取り組めます。また地域の人と出会い、関わりながら活動を展開していくことで、学びがダイナミックに展開できるようになります。地域の方々や関係機関と連携しながら取り組むことも大切な視点としております。

次に5年生が今年度1学期に取り組んだ国語、作家で広げる私たちの読書の学習を紹介します。この単元は本を選び、読んだ本について紹介するという活動を通して、読書の意義や本の面白さを広げることにねらいを持った単元です。導入では、地域の本屋さん、出版社、作家さんをゲストにお呼びしブックトークをしていただきました。児童一人一人の読みの力は異なります。児童の実態に応じて選書ができるように絵本から児童書まで、様々なレベルの本を用意いたしました。児童が互いに見あったり、教えあったりしながら、学習を進められるようにしています。席の移動を自由にしたり、自分のタイミングで離席して交流したり、学びあえるようにしています。児童が作成したポップは、本屋さん実際に展示してもらうようにしました。児童の活動や学びが学校を超えて地域に広がっていくことは、児童の大きな動機付けになりました。

他の事例としましては、本校では地元の農協関係者や農家の皆様からご指導いただきながら行う栽培活動を皮切りに、課題を設定して追究、発信していく活動も行っております。例えば3年生は金ゴマ、4年生は平山陸稲、5年生は古代米を学習材としており、今年度の3年生と5年生は収穫したものを保護者、地域に還元したいという児童の思いから、現在販売計画を立てております。さらに5年生は、日野自動車とコラボし、2トントラックを提供していただきまして、荷台の中がいわゆる展示スペースとなっており、その中で地域の方と対話をしたり、または自分たちがやっていることをお伝えしたりしながら古代米の販売を予定しています。地域の方々との活動を通して、地域を愛し、地域を誇りに思う子どもたちを育てていきたいと考えております。

また個別最適な学びや協働する学びの実現のためのツールとしまして、1人1台端末を活用しております。子ども一人一人の趣向や表現、学習のペースを大切にしたり、子どもたちが互いに交流したり考えを共有したり協働して作業ができるようになったりしました。子どもはデジタルドリルを活用して、個々にあったペースで学習に取り組んでいきます。また子ども自身で考え、判断し、学習課題をクリアする成功体験を積むことで、自ら学習に取り組む力を育むことができいております。また端末活用を通して、相互評価を授業に取り入れて、学習を進めております。

これらの研究を通して、子どもたちの学びが変わるとともに、学ぶ意欲も意識も高まってきています。今年度令和4年度東京都の児童、生徒の学力向上を図るための調査結果では、学びに向かう力などに関する意識調査を実施しているのですが、本校の肯定的な評価割合が東京都平均を大きく上回る結果となりました。いくつかの項目をご紹介しますと、自分で計画を立てて学習している、学習の途中でわからないところやできないところはどこかを考えている、自分が考えたことを積極的に他の人や先生に伝えようとしている、他の人と相談して考えを深めるようにしている、そして文章を読んで理解したことや考えたことなどを他の人に説明しているなどの項目が主なものとなります。主体的で協働的に学ぶ姿が数値としても現れてまいりました。実践をしてきた上で、これから私がやってみたいと思っていることは、学びの個別化および協働化を進めるツール

の1つとして、この1人1台端末を活用した学びをさらに進めていきたいと考えております。また地域の方や関係機関、企業、大学とコラボした学びを展開し、さらなる社会に開かれた教育課程の実現を目指したいと考えております。それから実践を通して先生方の視点で感じたことにつきましては、特に子どもの声や思いを生かしながら進める子ども主体の授業を進める意識が非常に高くなってきております。これまで学習の個別化と協働化に視点を置いて校内研究を推進し、各教科における自由進度学習の単元開発を中心に、一人一人を大切にしたい学び合いを進めてきました。すべての学年、教科で進めることはまだ難しい状況ですが、1時間の授業の中での一人一人を大切にしたい学び合いも大切な視点と考え、どちらも追究していく必要があると思っております。引き続き一人一人を大切にしたい学びと対話を含めた協働的な学びを進めてまいります。以上で本校の研究概要の説明を終わります。ご清聴ありがとうございます。

○ 和田第一中学校長

本校は GIGA スクール構想の日野市の研究奨励校ということで研究を進めておりますので、それについて説明をさせていただきたいと思っております。まず校内研究のテーマといたしましては、個別最適化の学習指導を目指す ICT 教育環境づくりということで、副題が ICT を活用した学び方、教え方、働き方ということで進めております。

まず、個別最適な学びについての例を挙げさせていただきます。本校は朝学習ということで短時間で朝学習をしているのですが、それを1日10分間行っております。その中で主体的に学習に取り組む態度が育つように、自分の学力に応じて学習内容を調整できるように課題の提示を工夫しております。全部 ICT 機器を使って必ずやれというものではなく、例えば数学では AI 学習ドリルに取り組んで自分の進度に応じた学習を行うこと、理科では Google フォームといいまして、アンケートに答えるようなフォームですが、それを小テストのようにして回答する。そうすることで自分の成績が出てきます。それを使いまして自分で自分の学習を振り返ることをやっております。定期的にどれぐらいできるようになったか振り返りながら、励みにしているところです。

それから、個別最適な学びの2番目としましては、これは当たり前ではあるのですが、デジタルコンテンツや AI ドリル等を活用した個別最適化された学習への改善ということでやっております。この1台端末が来る前は、調べ学習では基本的には地図帳見なさい、ここに書いてあるだろう、分かったか、はい分かりましたという授業が多かったのですが、じゃあ調べてって言うと、「こんなの書いてありました。」「こういうのが分かりました。」「他にもこういうのがありました。」生徒が自分でいろいろなものを調べるのです。それだけでも主体的な学習が行われております。それからミライシードという AI ドリルを入れていただきましたので、それを使って学習しております。それから、Classroom というオンライン学習システムの活用、このあたりがよく使われているものなのですが、たくさんありますけど簡単に紹介させていただきます。まず、ミライシードですが、これは AI ドリルということで、5教科分あり、これが数学のものなのですが、問題が表示されて、問題に答えた後に「答え合わせ」を押すと正解です、不正解ですとなって、間違えた場

合には答えとか解き方が出てきて、次の問題に進むというもので、できない問題が比較的次々に出てくるようなドリルでございます。これを授業中にやっております。ただですね、実は私違う自治体にいる時に日野市が ICT 環境がとても進んでいるということで、視察に来させていただきました。その時に行ったのが平山小学校で紹介を受けたのですが、その時に平山小は研究指定を受けていたということで、パソコンが 1 クラス分、40 台ぐらい余計にあったのですかね。それを見せていただいたときにはすでに子どもたちは授業の中で問題演習をやっていました。その時に先生の方のモニタには、子どもには普通は見せないのですが、誰がどこの問題を進めてるかというのが出ていたのですね。普通自由にさせていると二極化が進んでしまうのですね。できる子はできて、できない子はなかなかできないと。ですが、その先生はモニタで子どもたちの進度を見ているので、つまずいた子のところに行ってしっかり指導をするといったことを前々からやってらっしゃいました。それで、そのパソコンは棚といますか、収納庫といますか、オープンの可動式のものがあまして、そこにに入れて充電して、それが廊下にあるのです。それを子どもたちが持って行って自分で使ってまた入れると。本当にオープンで使っている感じだったので、一中でもそのようになっているなと思っています。

それから、Classroom という、これは子どもたちに教員から課題を出したり、この場で提出したりですね、オンラインで学習ができるようなシステムなのですが、この中の掲示板のようなところに、こういうものをやってね、と色々なものが出ています。これはたまたま今日から期末試験なのですが、少し前に学級委員が予想問題を作り、各教科それぞれ予想問題が上げてあったのですね。2 年生ですかね。そういうようなものを子どもが作って上げているのです。それを自分で見て家で取り組むのですね。こういったもので子どもたちはどんどん勉強を自ら取り組むといったことをやっています。

それから、次に協働的な学びです。これはクロームブックを活用して、情報収集や協働学習、学習成果のアウトプット等を行い、生徒の「思考力、判断力、表現力」を育成する授業改善を図るものです。生徒それぞれが個別に学ぶ場合は、どちらかという知識、技能的なものが有効なのです。計算練習ですとか単語を覚えるとか漢字を覚えるとか、すごく有効なのですが、思考力を高めるためには自分で何かを考え、それを発表して、あとは友達と比較するというようなことをすると、違う意見、広い意見だったり深い意見、それを取り入れて再構築するというような作業をすることで思考力が上がるので、そういう取り組みもしています。以前はグループの形の座席にしてホワイトボードに書いてたのですが、今はこんな感じですね。ジャムボードというホワイトボードに代わるようなものに、生徒それぞれが意見などを書けるのです。それで 4、5 人のグループでまとめる作業をして、グループごとにみんなに発表する。それに対して質問を受けて、さらに違う意見を取り入れる、そういうようなことを行っております。

それから 3 番目、学び方、考え方の改善ということ。教え方などは様々ありますが、コロナ禍において、オンライン授業もやっております。基本的にはコロナなどで出席停止になった生徒の希望があればやっているのですが、不登校の生徒にも時々やっております。不登校の生徒に全部やると、すべての授業をオンラインでやらないといけないので大変なことなのですが、

たまたまこれは防災訓練をやった時に避難訓練をして、そのまま家まで帰って、帰ったら家に帰ったことを先生に伝える、というようなことをやりまして、その後、学校が災害で授業をできないことを想定して、防災訓練の後に 1 つだけ授業をやりました。その日は教科というよりは安全指導の授業でしたが、そういったことをやって、何かあった場合には自宅でオンライン学習ができるようにということも含めた訓練をやりました。これは訓練なのですけど、毎日 5 人ぐらいはオンラインで授業を見ておりますので、これは日常化したような感じです。

それから、全国学力学習状況調査につきまして、この生徒質問紙というのがありますのでご紹介させていただきます。ちょっと文字が小さくて読みにくいのですが、この質問は 3 年生が受けた授業ですけど、1 年生の時に受けた授業でパソコン、タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用したか、という質問です。一番上が本校の結果なのですが、左から、ほぼ毎日、週 3 回、これで 9 割近くになっておりまして、都、全国と比べると倍ぐらい実施しているというのが分かります。続いて、学級の生徒と意見交換をする場面で、パソコン、タブレットなどの ICT 機器をどの程度使っていますか、という質問についても、東京都、全国と比べると 4 倍ぐらい、ほぼ毎日、週 3 回以上使っているが約 65%で、この利用についてはかなり進んでいると思います。それから、自分の考えをまとめ、発表する場面で、パソコン、タブレットなどの ICT 機器をどの程度使っていますかという質問についても、これもほぼ毎日、週 3 回以上使っているが都、全国平均の 3 倍ぐらい。それから、パソコン、タブレットなどの ICT 機器は勉強の役に立つと思うか。これはかなり多くの生徒、9 割以上の生徒が、有効だと回答しています。それから学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができているかという質問。これも比較的多くの生徒が実感していると回答しています。この 2 年間ぐらいはコロナの影響があり、グループワークの時間は短くしていたのですけども、パソコンの画面を見ながらだと、生徒同士にちょっと距離ができるのですね。ホワイトボードだとほとんど近くに行かないとできないということで、そういう意味でこれも有効であったのじゃないかなと思います。

今後の方向性の前に、ここまでやってきて感じたことなののですが、端末を家に持って帰ったり授業でも 1 日何回も使ったりするのですが、やはりどうしても壊れることがありまして、人数も結構多い学校でするので修理をしなければならないことがあります。一応修理代は出していただけることにはなっていますが、もはやタブレットがないと授業が成立しないのですね。壊れてしまうと端末がどうしても使えないものですから、欠席している子ものを何とかやりくりしていますが、壊れた場合には速やかに修理ができるといいなと思います。そのあたりは今後課題になるのかなと思います。

加えて、日野市はセキュリティがとても厳しいのですね。それはウイルス感染ですね。怪しいサイトなどに接続したときに感染してしまったりするので、そのあたりも何かしないとパソコンがない時には授業ができなかったりとか、保護者の方とつながりたい時に保護者の方がぱっと見たりできるというのはとてもありがたいのですが、子どもたちの道徳的な部分とセキュリティの厳しきなどをうまく調整していけるといいなと思います。もう 1 つ、プリントアウトが教員じゃないとできないのです。全員が調べたこと、例えば修学旅行で調べてきたことを壁新聞でみんなに知らせようと

いう時にはプリントアウトが必要なのですが、教員がやらないといけないので、教員は指導をしないでプリントアウトばかりをすることになってしまうのですね。生徒自身がプリントアウトできるようなことも今後できるといいかなと思っていますので、少しずつ検討して行っていただけるとありがたいなと思います。

それから最後に今後の方向性なのですが、全国学力学習状況調査で今年度は国語、数学、理科を行ったのですが、すべての教科で全国、東京都の平均を上回る状況になっております。やはり、タブレットなどを使って基礎的なものもしっかりできて、ただやはり思考力、判断力などについて、そちらも伸ばして行けるといいかなと思いますので、先ほどのような協働的な学習の場面で伸ばしていけるといいかなと思っています。発表は以上でございます。

○ 西田委員

北里校長先生、和田校長先生、学校の実践事例を発表してくださいましてありがとうございます。学校の実践事例は素晴らしいと思いました。本当に感銘を受けました。学びの個別化、個性化を実現するツールの1つとして、1人1台端末を活用した学びが確実に進んでいるということがよくわかりました。そのうえで1つ伺いたいのですが、先生方の中にはICTに苦手意識を持つ方もおられると思います。そのような方でもICTを活用しやすくするために校内ではどんな手立てをしているのでしょうか。教えていただきたいと思います。

○ 北里平山小学校長

平山小からお答えさせていただきます。個人の教員による1つの学級だけでICT活用実践を進めるのではなく、特に小学校の場合学級担任制をしているところもありますので、学年内で使い方を確実に共有した上で進めて行ってほしいということを伝えているところです。それからICT担当による教員研修も実施しようということで進めているところです。さらに管理職等による授業観察の機会には、今年度はICT機器の活用というものを視点の1つとして、そのような授業を作っていきたいと思いますということを位置づけているところです。そしてその授業観察は全教員への公開授業としておりますので、様々な教員が他の教員の授業を見る機会ということで、ICT機器の活用の仕方もそこで少し広がってくるというところを考えております。そして学校のホームページに私が毎日ブログという形でアップをしているのですが、教員のICT端末等を活用した授業を意図的に撮影しまして、こんな授業を学校では進めていますということを保護者に伝えるとともに教員にも見てねということでこんな使い方をしていきますよということを今伝えているところでございます。以上です。

○ 西田委員

ありがとうございます。よくわかりました。

○ 和田第一中学校長

一中の取り組みですけれども、ICT につきましては若手は、ほとんどがやったうれしい、入ってよかったという感じなのです。これ入ると楽だなということで、本当に目を輝かせているのですが、どちらかというとベテランの方がちょっと心配だなということをおっしゃいますね。ですから、その心配を無くさないといけないのですけれども、1 つは、各学年に ICT が得意な若手が入ってしまして、何でも聞いて何でも答えるというような形でやっています。それから教員の教え方とか働き方もあるのですが、本校はペーパーレスということで、職員会議もそうですし、朝の打ち合わせもペーパーレスでやっています。だからとにかく使わないと、パソコン中心に使わないとできないような仕組みになっていますので、得意不得意と言ってる場合じゃなく使うのが前提、使わざるを得ないというような状況です。今年来た教員は最初はびっくりしていましたが、意外とすぐ使っているような状況です。それからですね、昨年度研修で外部講師による研修をしているのですね。その講師の方がこれからの教育にはこういうのを使ったほうがいいとか、こういう効果がある、使わないとまずいのではないかみたいな、そういうのを客観的にしっかり示していただいているのですね。それがやっぱり大きかったと思います。以上です。

○ 西田委員

よくわかりました。ありがとうございます。

○ 高木教育長職務代理者

続いて私もちょっと ICT 関連でお聞きしたいことがあるんですけども、スマホやゲーム機等も含めて我々の時代とは様変わりしちゃってるんですけど、ICT 機器の使い方について、使い方によって生活習慣への影響ですとか近視を始めとする心身への影響ですとか、安全に関する課題、それから今、和田校長先生が言及されたウイルス感染の対応への問題とか、いろいろな課題が広く顕在化してきているわけなんですけど、児童、生徒が自ら家族などとも話し合いながら各種 ICT 機器の自主的な使い方、ルールを決めて運用することが大切ではないかと思います。GIGA スクール構想にて配布した 1 人 1 台の端末について、ルール作りなどについて、現時点での状況ですとか、課題、問題等についてポイントで結構なんですけども教えていただきたいと思いますのでよろしく願いいたします。

○ 北里平山小学校長

ありがとうございます。平山小学校ではまず昨年度の内にクロームブックの使い方というルールを校内で教員が中心になり作って、それを提示して子どもへ指導したということがスタートとしてございます。そして今年度になりまして、夏季休業中に家庭に持ち帰りを始めましたので、その前に今度は家庭での気を付けることということで、ルール等について教員の方で話し合いをしながら子どもたちへ指導、そしてご家庭にもこのような形で使ってくださいという保護者の皆さんへの配布文書を配布しました。今現在では、子どもが中心となってルールを決めるということま

ではまだ本校では至っておりませんので、今後高木先生がおっしゃったような子どもを含めた形でのルールというものを作って行かなければいけないだろうなと感じているところです。またタブレットを使う時の約束というものを日野市の学校保健会の方での養護教諭の方が中心となりまして、このような約束というものを作って、これは全小中学校に今年の秋に配布をしているものがございます。ただこれも教員側からというところもございますので、気を付けることは各学校で指導しているところかとは思っています。以上です。

○ 和田第一中学校長

続けて一中の方ですけれども、クロームブックの使用、貸出ルールというのを作ってありまして、内容としては学習に関する以外には使わない、壊れる可能性がある水気があるところは注意しなさい、とかが書いてありまして、これに同意しない人には貸さないということもありますという同意書というのを書いて出していると思います。その他、先ほどありましたように、夏休み前には再度通知を出しまして、保護者の方に家庭でのルールをしっかりと作ってくださいというような啓発をさせていただいています。それから、先ほどデータには示さなかったのですが、全国調査の中にもパソコンをどう使っているかとか、というものがあまして、その調査の結果では3年生はそれほどゲームとかに使う時間は長くない、都とか国よりはちょっと少なめということで、良好ではありました。ただ、どうしてもこのタブレットに限らず、家庭でゲームをしているという子どもも多いのです。不登校の子はそういう傾向がありまして、それは学校に来た時にいろいろ話を聞いて少しずつ個別の対応を進めているところです。以上です。

○ 高木教育長職務代理者

ありがとうございました。学校から支給された物については比較的ルールも決められていて、子どもたちも守っているのかなと思うのですが、やはりいろんなICT機器のありますので、それを含めた使い方といいますか、それでどうやって子どもたちの安全を守っていくかというのは非常に多くありますので、またいろいろ状況把握をしながら論議を進めたいと思います。よろしくお願いいたします。ありがとうございます。

○ 市長

他の方、よろしいでしょうか。教育長。

○ 堀川教育長

私から2人の校長先生にお伺いさせていただきたいんですけど、今の共有をいただいた実践に至るまで、基本構想ができて4年経とうとしていますけれども、管理職含めいろんな教職員の皆様の悩ましい部分とか試行錯誤とか3次構想の実現、具現化という意味ではあったんじゃないかと思います。その上で3次構想をどのように実践に移していくかという観点から、学校が変わってきて今があるということだと思っておりますけれども、学校がいい方向に変わっていくという観点

から、ポイントというのはどう考えられているか、校長先生のお考えをお伺いできればと思います。

○ 北里平山小学校長

では平山小から、私は今年度平山小に着任をいたしましたので、研究そのものはすでに昨年のうちにいったん終了と、それを継続してという形でやっているところではあります。研究奨励校ということも昨年度までの校内研究を中心に据えてこれまでやってきているんだというのがすごくよくわかりましたし、またこれまでの管理職の先生方が失敗を恐れずに挑戦を応援するような姿勢を持っていらっしゃったんだということもすごく感じます。それは継続して今年も教員の方に伝えている状況です。それから教員自身の成長を実感するような協働的な研究体制、孤立してやるのではなくチームでやるということができているというのは感じているところです。そして子どもの成長を実感できる数値などを示すということで、教員も自分たちがやっていることを自信をもってやって行けるだろうということ、それらを通して、教員にとっても主体的、対話的な取り組みになって行くのではないかと、それがよい方向につながっていくのではないかと私としては今捉えているところでございます。以上です。

○ 和田第一中学校長

一中の方からです。個人的な考えになりますけども、まず改善に向かう際にブレーキとなっている問題点というのはかなりあると思います。個別具体的にやりたいって思ってるのだけど、そうもいかない点というのがかなり学校でも共通にあると思うのですが、それをやはり確認してその支援をしていく必要があると思います。大体共通しているものもあると思うので、そのあたりを教育委員会の方々と協力してやらせていただけるといいかなと思います。細かいことなのですが例を言いますと、若手はICTが得意なのですが、ベテランの方は、オンライン授業やりましょうと言うと、やり方が分からなくて途中で切れちゃったりすると授業がうまくいかなくて、子どもたちに申し訳ないみたいなことが出てきます。だからちょっと今回はという話になるんですけど、では、それでつなげるようにマニュアル作りましょう、とマニュアル渡して、実際に小さな研修会を開いてやる、分かりましたとあえずやりましょう、でもちょっとみたいな、いろいろなものが出てくるんですね。では先に授業とは関係ない、朝に出席を取るだけやってみましょうみたいな話をして、やってみてできたみたいな、ステップを刻んでいかないとなかなかうまくいかないのですが、そういう何かブレーキや心配なことを、改善、解決していかないと先に進まないというのがあります。そのあたりが必要だと思っています。それから、ちょっと大きな考えになるのですが、私は指導方法がかなり変わってきていると思うのですね。もちろんICTはすごく大きなところだと思うのですが、その他に今の流れで言うと、いじめ対策推進法とかパワハラ防止法などが出てきている中で、指導の転換をしなければいけない、その中でPTAの活動も衰退してきているのですね。コロナ禍で。それから保護者との連携もあまりできない状況とかがあります。さらに、今後部活動が地域に移行していく流れがあります。個人的には部活動は担任が2人いるようなものだと思っていて、放課後2～3時間子どもと一緒にいて、土日も一緒、しかも土日には保護者と一緒に部

活動をやる、そういう傾向があったのですね。そうすると子どもはその先生に信頼を置いて、何かあった場合にはその先生のいうことはやっぱり聞かなければいけないみたいな、こともあったのですね。ですから、何かあった場合、担任に言うか顧問に言うか、2人そういう担当者がいるような形だったのですが、それが地域移行されるとなくなってしまいます。なおかつパワハラとかいろいろな現状がありますので、これまで、それやりなさい、それじゃダメだ、もっとちゃんとやりなさい、みたいなこういうような指導がしにくくなったのですね。そういうときには、子どもたちに寄り添うということを重視して、一緒に解決する、こういうふうにやるとこういうふうになるから、どうやってみようよ、そうですね、というように子どもがちゃんと目標を確認していくと、ではできなかったのは何かというように、寄り添っていくということが今後かなり手法としては中心になってくるのだと思います。そういうことをやっていくことで個に応じた指導に転換していくのかなと思っていますので、そのあたりの指導方法の転換というのが、すごく重要なのかなと思っています。以上です。

○ 市長

私から1点だけいいですか。パソコンを使った協働的学習の中で、クラウド環境を使って思考力を高めるということで写真がありました。設問を投げかける際には、どのように設問を投げかけるんですか。

○ 和田第一中学校長

例えば理科ですと、こういう現象が起きるといふ例示、好奇心を誘うような設問を出したり、何それって生徒が思うようなものが理想なんですけど。何でそうなるの？、こうなったからこうなるんだ！、みたいな生徒自身の声が出てくる。そういった好奇心を刺激するようなものを意識しています。

社会科ですと、こういう事象が起きてこうなるが、これについて何か疑問はないですか？と問い、生徒は、これは何でこうなるの？、みたいな「問い」をできるだけ自分で出していきます。出なければ教員が「問い」を出して生徒が調べる、そういうような形がよいかと思います。

○ 市長

仕掛けるということですね。分かりました。いろいろありがとうございます。

○ 高木教育長職務代理者

高木から意見ということで述べさせていただきます。平成31年の4月から始まった第3次日野市学校教育基本構想の取り組みも本年で4年目を迎えております。これまで3年半の間にわくわくプロジェクトとして先生方が自ら学ぶ場を作り、第3次日野市学校教育基本構想により学校や事業がどのようなものか対話を重ね、新たな教育実践を積み重ねてきました。プロジェクト3年間の活動については未来に向けた学びと育ちの基本構想プロジェクト活動報告、このような冊子をまとめていただきました。それからこの報告書に添付されました令和3年度の40件近い実

実践報告書は大変素晴らしい内容だと感じております。また先ほど事例紹介をいただきました平山小学校では、校長先生からの説明にありましたけども、第 3 次日野市学校教育基本構想の実現に向けて、令和元年度から 3 年間にわたり授業研究を重ねてきました。このような活動を始めとして、各小中学校で先生方が対話活動や ICT の活用方法等の研究や実践を重ねてきていただいています。ただいま説明いただきました 2 つの実践事例やわくわくプロジェクトの実践報告書を始めとする多くの教育研究報告書などからは、全体として第 3 次日野市学校教育基本構想の具現化が確実に進んでいるとの印象をもっています。また、日々の学習で児童、生徒たちがどのようにわくわくしているかということについては、昨年 4 月からの 1 人 1 台の学習用端末の導入に基づく ICT の活用によるところが大きいようにも感じています。一方で私たちが学校に訪問して授業参観をさせていただきますと、ICT 活用も含めた授業の状況では学校間での水準の差異や、教員間での濃淡を感じる部分もございます。第 3 次日野市学校教育基本構想の実現に向けて、先ほどのわくわくプロジェクトの実践報告の内容の共有化やステップアップなど、さらに全体的な授業改善や学習方法等の質的底上げを図っていく必要があると感じています。引き続き基本構想の最終年度に向けて、関係者で力を合わせて取り組んでいきたいと考えていますのでよろしくお願いいたします。

○ 真野委員

今日は平山小学校、それから第一中学校の研究の内容を紹介いただきまして大変ありがとうございました。この第 3 次学校教育基本構想の学びの個別化、協働化を進めるためのツールとして、1 人 1 台の端末がとても有用であるというお話がありました。また私もぜひ導入をとということで進めておりましたミライシードなどの教育のアプリソフトも有効に使ってくださっていることに大変ありがたいなと思います。直接手を挙げてみんなの前で話すことができる子どもたちもいれば、パソコンに向かってなら入力ができる、そういう子どもたちもいます。1 人も取り残さないためにどのようにこのパソコンとかアプリソフトを活用して行けばいいのか、正解があるのではなく試行錯誤の連続ではないかなと思います。今日も色々そのようなお話も伺いました。その意味でも現状色々推進して下さっていますが、子どもたちが光った瞬間というか、これが効果的だったなという瞬間を捉えて、そういった事例などを学年とか学校とか、また日野市内でもどんどん発信をしていただいて、お互いに新たな気づきが増えていくような、そんな形でさらに推進していければいいなと感じました。先生方にはこれまで以上に多くのことが求められる訳だと思いますけども、この学びの個別化、協働化を進めるためには 1 人 1 台の端末を最大限に活用していこうという、そんな中で私が言うのもあれですが、先生方が謙虚に、自分磨きをしていただきたいなと思います。先生が子どもたちのために自分磨きをしている姿とかある意味ではうまく使えなくて試行錯誤して、もがいている姿は決して恥ずかしいことでもなく、私は子どもたちにとって最高の姿、教育環境を提供して下さっていると思います。ぜひ力強く推進をしていただければなと感じました。どうもありがとうございました。

○ 東委員

北里校長、和田校長、ありがとうございました。第3次日野市学校教育基本構想ができてから学校で様々な実践が行われてきたんですが、先ほど発表いただいた平山小学校は特にフラッグシップ校として、コロナ禍が来る前、GIGAスクールが入る前から研究推進をして、昨年の2月には3年間の集大成である研究発表会も実施されました。そこでは、先生たち自身、大人同士の学び合い、先生は子どもの姿から学ぶことを大切にされていました。子どもたち同士が自然と学びあう土壌をずっと耕してきて、本当に言葉だけではないんですけど学びあう環境をデザインされてきておりました。言葉でまとめる以上に実際目の前に広がる世界は、驚愕でわくわくするものでした。子どもたち自身が自分たちで学び方を選択している姿であるとか、見るシーンによっては机の置き方やデザインも、また自分が落ち着くところというのも自分たちで決めて、校庭の方を向いている子もいれば廊下の方を向いている子もいるし、そういう空間も見せてもらえました。また先ほど発表にもありましたけど、手引きというガイドラインに沿って子どもたちが目当てを立てるんですけど、その目当てを立てて自分でどこまでできたかなという振り返りをしているわけで、そうなるそれを見た研究発表の見学の時だったと思うんですけど、子どもがその一つの項目に対して半分の丸を付けたんですね。それはどうしてというところは自分では分かったんだけど友達に教えられまでのレベルで分かってないという、そこまでちゃんと振り返られて、この單元に対して理解をどれだけできたかなという、自分で分かるという自分の物差しを持っているというのは、相対的な成績とかいうものではない学びのコントローラーを持ったんだなという姿を見せていただきました。まだまだ過渡期であると思っているので、他校などを見ているとどうしてもその選択肢を準備するためであるとか授業の準備をするために先生たちがすごく労力をかけて頑張ってるしやる、ご苦労を掛けている状況は拝見しております。ただ絶対子どもたちの学び合いの変革は必ずや先生たちの子どもたちをそれぞれに見なければならぬという負担を軽減して、子どもたちの中で学び合いが始まっていくという、そういうところで学びの変革というのは今徐々に起こっているという感覚です。ですので、先生たちには失敗を恐れずに先ほどのお言葉じゃないですけど、チームでフォロー体制を作ってサポートして、教育委員会としてもチャレンジを応援していきたいと思っています。また実践報告にもありました通り、クロームブックが学びを変革したなということは間違いない感覚です。学校訪問に行くといわゆる中学校などではよくあるんですけど、一律一斉の講義式の授業から脱却している。子どもたちがクロームブックを使ってワークをしていて、飛び交う言葉も子どもたちの笑顔も増えたなという印象です。例えば、体育とか音楽でもこういったクロームブックを利用しているというのは本当に多くの方に知ってもらいたいと思いますし、体育だと動きをお互い確認する、音楽でもチームで合唱を録って、今のはどうだったかなって客観的に観る。そういうような使われ方がいろいろされているようです。ただ、まだまだ学校によっては使い方など進捗は様々ではありますけど、1つだけ大きくこのクロームブックが来たことでつながったというのは、やはり今まで不可能だった学校の外とつながるツールにもなったということで、もちろん不登校の子とつながればつながりたいんですけども、それだけでなくコロナの濃厚接触者であったりとか事由は問わずにオンラインの授業というのが学校訪問などでも確認ができていますし、先

日運動会を休んでいる子に配信をするんだということで、クロームブックが本部席のところにも置かれていて、そのように活用もされていました。日野市の学校教育は、今度は第 4 次日野市学校教育基本構想に向けて、次のステージに向かっていかなければならない時期になってきました。学校の思い、保護者の思い、地域の思い、そして一番大切な子どもたちの思いを大切にして、2030 ビジョンと連動をした新たなものを生み出して行ければと思います。以上です。

○ 西田委員

一中と平山小が素晴らしい教育実践を紹介してくださいましてありがとうございました。日野市の学校では、第 3 次日野市学校教育基本構想が目指す自分に合った多様な学びと学び方、自分たちで考え、語り合いながら生み出す学び合いと活動、すなわち教育界の言葉で言うと個別、最適な学び、協働的な学び、プロジェクト型の学びの教育実践に学校を挙げて取り組んでおり、大きな成果を上げておられます。今後ますます研究と工夫がなされて学びが深まり、子どもたちの学びの風景も大きく変わっていくと思います。実践を加速させているのは何と言っても 1 人 1 台の端末の導入が大きいと思います。一層端末を使った学習が研究されて、一人一人を大切にした学び合いをはじめ、新たな学びが各学校、各教室、様々なところで展開されていくことを期待しております。同時に日野市の教育が今まで大切にしてきた、命をベースにした本物から学び、本物を育て、本物に感動する体験学習と、それを表現する教育活動を今後も引き継ぎ、発展させていただきたいと思っています。よろしく願いいたします。以上です。

○ 堀川教育長

私の方からも意見を申し上げさせていただければと思います。着任して以来、2030 ビジョンとも共通する考え方かなとも思うんですけど、着任以来、第 3 次構想と向き合ってきた中で感じていることなんですけども、素晴らしい構想を作って終わりじゃない。むしろ作ってから関係者が力を合わせてどうとにも具体的な取り組みを進めて行けるかということが勝負なんだなと感じています。その上で本日、本当は各学校に素晴らしい実践をご紹介いただければというところだったのですが、本日ご紹介いただくことができた 2 校の事例というのはこれまでの関係者の汗、努力の積み重ねで素晴らしい実践と成果が生まれているということかなと受け止めています。その上で学校と行政との関係という観点からの意見なんですけども、質問もさせていただきましたけども、これから大事になっていくことというのは、現場が未来に向けて前向きに変わっていく、そのために行政がどういう役割を担っていくのか、果たすことができるのかという問いと我々はしっかりと向き合っていくということだと考えております。2030 ビジョンの議論においても、行政と子どももパートナーなんだという話、議論がありましたけども、行政、学校、家庭、地域、そして市長部局も含めてのパートナーとして、ぜひ一緒に歩みを進めて行ければと考えております。なお、和田先生から具体的なご提案、お話もいただきましたけども、財政的な面からの検討が必要な部分もありますので、そういう意味では優先順位を決めながらということにもなるかと思うんですけど、現場のニーズをいただけるというのは大変ありがたいことですので、しっかりと具体的な詳しいニー

ズというのを教えていただきながら受け止めさせていただければと思います。私からは以上です。

○ 市長

多くの貴重なご意見をありがとうございました。引き続き、市長部局と教育委員会が協力しながら取り組んでまいりたいと思いますので、ご理解、ご協力をお願いいたします。

それでは最後に次第の 3、その他について、事務局より説明をお願いします。

○ 中村企画経営課長

それでは、始めに教育大綱の見直しについてご説明いたします。

平成 27 年度に策定された教育大綱についても見直しの時期となっております。今回議題にもございました「2030 ビジョン」と関わり合わせながら検討を進めるということで、策定時期を令和 4 年度として、説明させていただいていたところです。

一方で、来年度は日野市学校教育基本構想の改定時期であるということ、教育大綱を策定する上で、参酌することと地教行法に定めのある、国の教育基本構想の改定時期であることから、これらの状況をみながら改訂作業を進めさせていただければと考えております。

続いて、今後の総合教育会議につきまして、ご説明申し上げます。

この後の総合教育会議につきましては、本日の会議を基本として、緊急な案件が発生する等、議論すべき事項があった場合、その都度ご相談の上で開催をさせて頂きたいと考えております。事務局からは以上です。

○ 市長

ただいまの事務局からの説明について、または、その他全体を通してご質問、ご意見がございましたらお願いします。

なければ、今後については事務局からの説明通り進めさせていただきますのでよろしくお願いします。

本日予定いたしました議題は全て終了いたしました。

これをもって令和 4 年度第 1 回日野市総合教育会議を閉会いたします。